

〈講演〉

中世ヨーロッパにおける王権と正義（＝裁判）

ビヨルン・ヴァイラー
朝治啓三 訳、解説

解説（朝治啓三）

ヴァイラー教授講演について

ウェールズにあるアバリストウィズ大学歴史学部ビヨルン・ヴァイラー教授は、訳者である関西大学文学部教授朝治啓三の科学研究費による招聘計画により、2012年9月27日から10月5日にかけて来日し、関西大学と京都大学で西洋中世史に関する2種類の講演を行った。訳者の基盤研究Bの研究計画では、中世英独仏関係史に関する欧米の最新の研究成果を取り入れ、日本人研究者による国際的水準に見合う研究を行うことが目標とされている。ヴァイラー教授の最近の研究成果は、この計画にふさわしい内容を持ち、我が国に教授を招聘して日本人研究者との間で討論を行うことで、より良い研究成果を生みだすことが期待出来る。今回は二つの講演のうち、関西大学で行われた講演の内容を邦訳した。

ヴァイラー教授はドイツ出身であるが、スコットランドのセント・アンドリュース大学で学位を取得し、現在はウェールズのアバリストウィズ大学で歴史学の教鞭をとる。中世国制史を専門にすると同時に、そのほかの分野、例えばマシュー・パリスなどの年代記にみられる王権の記述の国ごとの比較や、イングランドで起きたシモン・ド・モンフォールの乱のドイツの年代記にみられる記述の検証など、12、13世紀西ヨーロッパ全体を視野に入れた歴史像を描いてきた。主要な著書としては、*King Henry III and the Staufien Empire, 1216–1272*, Boydell & Brewer, 2006; *Kingship, Rebellion and Political Culture; England and Germany, c.1215–1250*, Palgrave, 2007 などがあり、共著や編著も多数ある。イングランドの13世紀史学会の開催を過去10年にわたって引き受け、2年に1度、その報告集を刊行し続けている。訳者は2000年にケムブリッジ大学クレア・ホールで在外研究を行った際、当時スウォンジー大学に所属していたヴァイラー博士が主催した「ヘンリ3世時代史研究集会」で会い、その後も、リーズの国際中世学会でもそれぞれが研究発表を行った際に出会った。2010年、アバリストウィズ大学での13世紀史学会の際に、訳者が主宰する科学研究費に拠る外国人講師招聘の計画を伝えたところ、来日して日本人研究者と意見交換をするという同意が得られた。2012年9月、ケムブリッジ大学トリニティ・ホールでの日英歴史家会議でも、ヴァイラー教授は訳者の行った研究発表のコメンテータを務めた。

12世紀のドイツとイングランドとでは、国王の裁判機能が大きく異なっていた。神聖ローマ皇帝フレデリック1世バルバロッサは、諸侯相互間で紛争を軍事的に自力回復しようとする傾向を抑え、皇帝が裁判の場で平和的決着を結ばせることが、正義の実現であるとなっていたとい

うように、当時の年代記には書かれている。これに対して同時代のイングランドの年代記には、ヘンリ 2 世が国王役人を駆使して、積極的に諸侯間紛争を裁判によって決着をつけさせていたことが書かれている。このイメージが事実を表現するものとみなし、イングランドとドイツの 12 世紀史が数多く書かれてきた。分権的で皇帝権の弱いドイツに対して、集権的で国王行政諸機関が大いに発達していたアンジュー家支配時代のイングランドという歴史像がそれである。

しかし年代記の研究が進むにつれて、その中で説明されている事例がどこまで事実を反映しているかについて、複数の解釈が存在し得ることが分かってきた。イングランドでも、国王行政機関や、裁判制度が形をなすのは治世後半のことであるし、ヘンリ 2 世が創設したとされていた諸制度は、それ以前の時代、アングロ・ノルマン王の時代に存在しており、それを引き継いで形を変えたことも分かってきた。イングランドの裁判制度が中央集権的であるといえるのは 13 世紀になってからのことで、ヘンリ 2 世治世にはスコットランドやウェールズ辺境では殆ど国王の権威は浸透していなかった。ヘンリ 2 世時代のイングランドでも、裁判は地域の住民の陪審によって決せられることが多く、国王が一方的に判決することは避けられた。この特徴は、ドイツにおいては帝国諸侯の集会で、諸侯間の紛争が諸侯の合意に基づいて、皇帝の名で裁決が下されたことと類似している。

つい最近まで現代の歴史研究者は、年代記の記述に依拠し過ぎていた。ドイツの年代記著述の伝統や慣習と、イングランドのそれとは、共通する面もあるが異なる面もあり、その伝統がそれぞれの地の文化であった。羊皮紙に書かれたオリジナルな文面であるというだけでは、そこに書かれた内容が事実であるという保証にはならない。写本研究を含めて、歴史事実の解釈は多様であり得ることを、研究者は肝に銘じるべきである。

ヴァイラー教授の関大講演は授業期間中に行われたが、学生、院生、教員を含めて多くの参加者を得て、講演後の質疑応答も活発に行われた。教授も質問が的を射たものであったことを、後日、感動を持って語られた。京都大学での講演はより専門家向けの内容であったが、質問も研究水準の高さを示すもので、質疑応答とも英語で行われた。

(当日は著者が地図をパワーポイントで図示した。注は訳者が施した。講演内容は、先にヴァイラー教授が論文‘King as Judge: Henry II and Frederick Barbarossa as seen by their Contemporaries’, in *Challenging the Boundaries of Medieval History*, ed. by Skinner, P., Brepole, 1992 で述べられた内容を、講演用に書き改めたものである。)

講演 (ビヨルン・ヴァイラー)

国王というものが正義の守り手であるということは、全世界的な基準である。それはサンスクリット文学にも、初期イスラムの著作にも見出される。中世ヨーロッパも例外ではない。王権についての最初期の事例からして、正義が国王の義務の中心的焦点であった。7 世紀にセヴィーリアのイシドルス⁽¹⁾が語源論を始めた。原本がそのカギとなる用語の意味を説明するのであり、その用語から、それらの用語が世界の道徳的原理と、正当な秩序の文脈で意味するところに関す

る、指導原理を導き出すという方法である。彼の書物はすぐさま、ラテン中世においてもっともよく転写された書物の一つとなった。イシドルスは王権を「正しく行為すること」と定義した、すなわち正義をなし平和を維持すること、である。中世を通じて頻繁に複写された初期中世の書物は、偽キプリアヌス⁽²⁾の『世界 12 の不正』についてである。その中では、専制と悪しき王権は、正義が存在しないことであると定義され、自らを守ることができない人々を支配者が保護したがること、そして平和を維持できないことを意味した。すなわち正義をなすことと平和を維持することが王権の核心をなすということが、実際に、国王という職・役目が生み出された目的であった。その考え方は中世を通じて王権に関する著作に行きわたっていた。それは年代記、助言のためのガイドブック、神学著作、あるいは「国王の鑑」（よき国王権の原理概観）と呼ばれるものなど、様々なジャンルの中に表れている。これらすべてが平和を維持することと正義をなすこととの間の、明確で近い繋がりを確立したのである。

しかしながら、正義とか平和維持という用語は複数の意味を包含する。例えば、弱者保護とは何を意味するのか。それは如何にして為されるのか。国王は公平性を維持するという必要と、寛大さを示すという必要との間で、いかに釣り合いをとるのか。そのような疑問は中世の現象だけに限ったことではない。これに対して、近代の多くの社会には、司法に通じた専門家集団がいて、彼らは厳しい訓練を経ているので、成文法の全体系を参照できる。中世の文脈では、これらの手段や制度や構造物の多くは、欠けているか、まだ発展途上であった。例えば私は 12 世紀に焦点を当てたいと思うのだが、その世紀にほとんどのヨーロッパ社会は公的な意味での成文法を欠いていた。司法原典はあったとしても、しばしばそれは、国王の依頼や権威によって作られたのではなく、委託制作されたものであったり、個人によって書かれたものであったりした。このことは必ずしも原理原則に相当するものが存在しなかったことを意味してはいないし、人々が正義とは何かとか、正義をいかに機能させるかを考えなかったとかいう訳でもない。しかし、司法の基準を機能させたり解釈したりすることは、議論を生むことであったり、偶然あるいは機会や状況によるものであった。

今日の講演で私は、12 世紀に暮らし著作していた人々が、これらの課題をいかに取り扱ったかを考察する。彼らが課題をいかに解決したかを知ることが、逆に我々に、中世ヨーロッパの将来の発展にとっては大変重要な時代の、社会的・政治的構造について、また正義をなし平和を維持するという経験と実践について、多くのことを示してくれる。同じように、それが中世ヨーロッパのもう一つの決定的な特徴に光を当てることを可能にしている。すなわち複雑な政治的景観、そして同時代の人々が共有していた疑問点への様々な回答、また共有されていた基準や原理について彼らが義務付けていた読書の範囲などである。とはいえ私は西欧全体をつぶさに調べるのではなく、二つの王国、すなわちイングランドとドイツ、とくに二人の国王、すなわちイングランド王ヘンリ 2 世⁽³⁾（1154–89）とフレデリック・バルバロッサ⁽⁴⁾（1152–90）に焦点を当てる。彼らは基本となる政治的組織（ともに王国的社会であり、世俗的あるいは聖界的な機能を通じて、自己を確立しているエリートたちが支配している社会）を持つ点で共通しており、国王や貴族の権力の性格と制限についての考え方でも共通していた。しかしこれら二つの王国は、抽象的

な意味での基準を政治的に具体化する点では、全く異なった二つの道筋を代表していた。イングランド国王が、彼らに先行するアングロ・サクソン王たちの行政的諸制度に磨きをかけたのに対して、ドイツの皇帝は同盟、たとえば顕著な職務を帯びるという名誉や地位をめぐる議論を通じて同盟するという、非公式なネットワークに依存していた。その結果、イングランドは中世ヨーロッパでは殆ど並ぶもののない行政的王国となった。これに対してドイツでは歴代の皇帝は、自己の権力を顕示しようとする者たちにますます依存せざるを得なくなり、それにつれて、封臣としての諸侯たちに影響を与え支配するという彼らの能力は、実際には衰えていった。二つの王国はこのように、様々な点で二つの特に衝撃的と言えるほどの実例として存在したといえるかもしれない。例えば、正義は如何になされるかとか、正義の原則は如何に解釈されるかなどについて、中世王権の行使のされ方の対照的な特徴についてである。その結果、本日の講演で聞き手はおそらく次のようなイメージを持つことになる。一つは中世ヨーロッパを一つの全体として認識しうる共通基準についてのイメージであり、もう一つはそれにも拘わらず、ヨーロッパ共通の基準やその実現形態が内包している多くの多様性についてのイメージである。

I

イングランドとドイツの年代記はともに、平和維持と正義の実現（裁判の実施）とを国王の至上の義務として位置付けている。例えばニューバラのウィリアムはヘンリ2世の王位継承と彼の治世初期を記述する際、彼の封臣たちが何を期待したのかについて次のように記述している。すなわち、国王は正義のための熱意とともに、分別と一貫性を併せ持つべきであると⁽⁵⁾。ヘンリが期待に答えて、法の厳格さをかくもうまく回復したので、「狼のようにふるまっていた者も羊となり、そうでないものは王国から離れた。」⁽⁶⁾ハンティンドンのヘンリは同様に、1154年にヘンリが即位することによってもたらされた、ほとんど奇跡に近い平和の実現を讃えている⁽⁷⁾。この賞賛はヘンリの治世初年に限らない。例えば、デイスのラルフは1177-79年のヘンリによる行政改革⁽⁸⁾に多くのページを割いている。正義への強い熱意に動かされたヘンリは、シェリフ（州長官）を糾し、彼らの地方行政の執行状況を調査するよう命じ、その結果、法の強制を実物的な利害関係に優先させる人々が、（後任として）任命されることになった。それはヘンリが臣下に対して、正義が為されているか否かを重視していることを示そうとしていたからである⁽⁹⁾。

同じようなイメージはドイツの史料からも浮かび上がる。例えば1200年頃に著作していたウルスベルクのブルハルトは、バルバロッサの治世について説明する際、新しく王になった人物の徳を並べ立て、その徳の中でも一番は、ドイツの諸侯たちに平和をもたらすという彼の希望であるとみなした⁽¹⁰⁾。同様に、1156年ごろ、フランジングのオットー⁽¹¹⁾は、フレデリックの前任者であるコンラート3世⁽¹²⁾が、バルバロッサを鼯負して、自身の息子であるフレデリック・オヴ・ローテンブルクの権利主張を却下し、バルバロッサこそが平和を回復し、王国中の正義を維持しうるとみなしたと述べている⁽¹³⁾。イングランドのヘンリ2世と同じく、皇帝とは公共秩序、正義、そして法の規則を保証（あるいは回復）するべき存在なのであった。

しかし重要な違いも存在した。まず初めに、ドイツでは、平和維持の役割は国王だけに限られた任務ではなかった。そうではなくて世俗権力を持つすべての者にまで拡大された任務だった。従ってオットーやブルハルトのバルバロッサ像に近い説明が、『シュワーベン公ヴェルフ家の歴史』⁽¹⁴⁾の中に見出されることに気づく。すなわち公は自分の直轄地を恒常心、正義と好意でもって支配し、自分の臣下を抑圧しようとする者に対して、臣下を保護したという事例とか、あるいは匿名の著者による『トリア大司教事蹟』⁽¹⁵⁾が、トリア大司教アルペロ（1080–1152）⁽¹⁶⁾を取り上げて、彼の在位中には、戦争が無かったこと、その結果彼の土地が荒らされなかったことを、特筆したという事例である。これに対してイングランドの史料では、高位聖職者は国王の要求に抵抗する勇気があったとして讃えられた。彼らは決して、犯罪人や平和破壊者たちを追跡することには関わらず、王にそうせよと命じられたときのみ応じたのである。同様に、平和を維持することは世俗貴族が為すべきことの中には挙げられてはいなかった。それは国王のみが為し得る仕事であった。

さらに平和を維持し正義をなすことは、ドイツとイングランドでは異なる見方で解釈されていた。この点を調べるために、まず年代記作者ニューバラのウィリアムが、1154年のヘンリ2世の王位継承について書いた一節を考察してみよう。「新王は、彼の前任者によって雇われていた傭兵を排除することによって、そして彼の許可なしに構築された城を破壊することによって、公共秩序と法の支配を回復した。」⁽¹⁷⁾最も大事なことは、しかしながら、ヘンリが正義（裁判）の管理を改革し、適格な裁判官や行政官を任命したことである⁽¹⁸⁾。すなわちヘンリが直面していた仕事のいくつかは、フレデリックが担わねばならないものに類似していたが、しかし彼の臣下たちの目には、王が城を破壊し傭兵を排除することは、王の代理となって働いた確かな人材を任命することに比べれば、補助的でしかなかったからだ。この点への関心は、イングランドの歴史記述に共通してみられるテーマにも反映されている。他方国王の役人を統制する必要というテーマは、ドイツではめったに書かれなかった。宮廷での生活の悪い点と危険性とは、12世紀イングランドの著作のあらゆる分野の主題をなしていた。もっとも有名な例は、おそらく、ウォルタ・マップの『宮廷寓話集』⁽¹⁹⁾であろう。それはリンカン司教からヘンリ2世に与えられたと思われる警句から始まる。すなわち王の役人どものやることは、彼らのそして国王の安寧を、永遠に危険にさらすであろうという内容である。そして結語は、次のような補足、すなわち国王は常に警戒していなければならないし、密度の濃い監督が無いならば、彼の役人たちに決して権力行使させてはならない、である。同じような問題関心は、年代記作者カンタベリのジャーヴェイズによっても表明されている。すなわちヘンリの登位に際して大司教シオボールド⁽²⁰⁾は、「宮廷のオオカミどもの常習的な悪と飽くことの無い貪欲を見て、少年のように、自身も怯えた。」⁽²¹⁾同時代のイングランドの観察（年代記作）者たちはドイツの同時代人に比べて、明らかに、国王宮廷に、はるかに大きな重要性を付与し、同時に宮廷を構成する者たちを監督する必要を示した。

しかしこれが唯一の違いという訳ではない。年代記作者のフランジングのオットーが報じているのは、1152年のフレデリック・バルバロッサの戴冠式の最中に、何らかの罪のために面目を

失っていたある騎士が、国王に近づいた時のふるまいである。彼は主君の足元に身を投げ出し、王の好意を回復できるよう期待した。しかしフレデリックは動じなかった。このやり取りを見ていた者たちは、フレデリックが若いのにそれ程までに正義の不変性を保ったことに驚いた。我々の目的にとっては、この出会いの鍵となる特徴は、フレデリック・バルバロッサが彼の正義を実施するときのやり方、すなわち公然たるそして象徴的な拒絶という行為である⁽²²⁾。この機能を国王に代わって果たすことのできる、あるいはそう期待されている国王役人はいなかった。こうして、フレデリックが正義をなさんとする彼の希望をいかに表現するかということと（それらは判決に至る公式の手続きを通じて実行されるとは限らないのだが、一連の象徴的な行為を通じて）、ヘンリ2世が同じことをどのように実行したか（実際にはフランドル傭兵を排除し、自分の代わりをする適切な役人を任命したのであるが⁽²³⁾）ということとの間には、重要な違いがあった。この違いは、支配者が正義を為しているとか、平和を確保している者として描かれているときには、何を意味するのかについての非常に異なる解釈を意味している。

オットーにとっては、平和を維持するという課題は、ライバル関係や不和を落着させる課題に比べれば、軽犯罪者を追跡したり、悪人が懲らしめられたり、殺人者が絞首刑に処されたり、その他の罪びとが投獄されたり、身体切断刑によって傷跡を残すよう仕組むことよりも、軽微なことであった。バルバロッサは治世初期にはこうして、ハインリヒ獅子公⁽²⁴⁾とオーストリア大公ハインリヒ・ヤズミルゴットとがバイエルンをめぐって争っていたのを調停したり⁽²⁵⁾、マインツ大司教とパラティン伯⁽²⁶⁾との争いを調停することに⁽²⁷⁾、忙殺されていた。ヘンリ2世と同様に、バルバロッサもこれらの仕事にかけては有能で、祖国の父のあだ名を手に入れるほどであった。普通の犯罪人の追及は、それが皇帝自身の関係者を巻き込むものでない限りは、皇帝の権威よりも下級のものとみなされた。より重要なことは、王国の諸侯たちの間の紛争を仲裁して解決し、妥結策を交渉する彼の能力の有無であった。ふつうは皇帝が武力を用いるのは、現地諸侯たちのそれまでの努力が不首尾であるときか、皇帝自身の支配下のものが関係する場合のみであった。

皇帝の臣下によって始められた訴訟における皇帝の役割も、同じように定義される。彼が必要とされるのは、特定の訴訟手続きを合法化する場合とか、一方の訴訟当事者の側に、彼の政治的影響力を貸し与えるためにであった。結局、対立は現地で解消されるしかないというのが、明らかな見通しだった。というのはフレデリックが対立や不和を解決した場合（と同様に）、1163-64年にシュワーベン公ヴェルフと、テュービンゲンのパラティン伯フーゴとの間での不和のような例がいくつかあるからである⁽²⁸⁾。ある例ではフーゴが強盗に関与した騎士の一団を捕えた事件が発端であった。その一団のうち二人は彼のハウスホルドに所属していたが釈放され、公ヴェルフのハウスホルドに所属したものだけが絞首刑になった。フーゴがヴェルフから所領の一部を保有していたといわれる事実によって、事態は複雑化した。つまり彼は自分の主君の部下を処刑したことになるからである。公の息子がイタリアから戻り、伯の土地を剥奪しはじめるに及んで対立はエスカレートした。ヴェルフの息子がテュービンゲンを攻撃した時、彼の軍は総崩れとなり、その支持者の多くが捕えられた。父のヴェルフは1年間の和議を結んだが、それが終わる

と対立は再燃した。皇帝が介入したのはこの時点においてである。皇帝は1164年の春にシュヴァーベンのウルムに国会を召集した⁽²⁹⁾。祝祭を兼ねた諸侯の集まりにおいて、この対立が議論され、フーゴがこの騒乱の張本人であるとみなされた。しかしフレデリックは、自身で判決を下したわけではない。むしろ、諸侯の助言を聞いたのち、フーゴに、王国を忌避するか、公ヴェルフに彼が加えた損害を賠償するかいずれにするかを尋ねた。この決定を強制する役は公ヴェルフに委ねられた。フーゴは、皇帝からの援助が期待できなかったことを悟り、ヴェルフの慈悲に身を委ねたが、公によって投獄された。すなわち、フレデリックはこの対立を解決するために介入することはせず、単に暴力を制限し、順正化することによって平和を守るのみであった⁽³⁰⁾。

これまで見たことから、いくつかの特徴が浮かび上がった。年代記に見る限り、ヘンリ2世は正義の唯一の源泉であり続けた。彼の主たる義務は刑事犯罪人を懲らしめることであり、これを実行する最良の手段は、的確な裁判官を任命することであり、彼らを注意深く監視することであった。これとは対照的に（神聖ローマ）帝国では、国王（＝皇帝）の裁判は確かに犯罪人の処罰に関与したが、それは諸侯や高位聖職者と協働すべき機能であった。そして不和を解決するという支配者の能力の方がより重要であるとみなされた。我々の次の課題は、国王の裁判権を定義する際のこれらの相違は、その裁判権が実行される際の描写のされ方に反映されているか否かを、調べることになる。

II

ドイツでは、裁判をなすことは集団的事業であった。皇帝は訴訟手続き全体を統括する場合もあったが、その際には諸侯との緊密な協力のもとに行った。衝撃的な事例は1180年代のハインリヒ獅子公の没落⁽³¹⁾についての報告に見られる。ハインリヒはフレデリックの近しい親戚であったから、皇帝の最も信頼する助言者の一人でもあった。しかし、その最良から急に、そして見劣りする為体で、没落した。彼の地位喪失の記述には、特筆すべき次のような違いがみられる。フレデリックの支持者の説明では、皇帝が諸侯と協力し、彼らの依頼に基づいて行動したと述べるのに対し、彼に敵対する年代記は、皇帝が諸侯を騙してその行動に至らせたと述べる。すなわち、いずれの場合も皇帝は合法的に諸侯の依頼によってそうする時にのみ、介入し得たのである。

国王裁判権の公的性格というものは、広範囲な意味合いを持つ。最も大事なことは、裁判を見る人たちの構成が意味を持ったということである。何故なら、見る人たちが尋問の結果を決定するからであった。1152年にカンブレイ司教とフランドル伯が皇帝のもとに来た時、彼らは、自分たちが訴訟をする際の強力な支持者を持っていることを確認しようとしていたのみならず、裁判傍聴者の構成にも影響力を及ぼすことを望んでいた⁽³²⁾。その結果、バルバロッサが1156年に、ハインリヒ獅子公とハインリヒ・ヤズミルゴットの間のバイエルン領有をめぐる紛争を模索した時、ハインリヒ・ヤズミルゴットは最初、敵方の支持者が強いレーゲンスブルクの国会へ出むこうとはしなかった。それに代えて、彼は2マイル外に陣営を張り、諸侯たちが公式に、フレ

デリックが提案した解決案を確認するまでは、集会に出席しようとはしなかった⁽³³⁾。

裁判（正義）に関する公的立法は、支配者が彼の義務を果たすという能力と意欲とを示していた。それは国王と諸侯との連携を象徴していた。そしてそれは、一つの決定が広く知られるようになるというだけでなく、合意に到達することに参加した人々が、それを強制する義務を負うと感ずることの保証となった。1152年にカンブレイ司教ニコラスが、フランドル伯に対する訴訟を提起した時、どちらの当事者も本人が議論することはなかった。そうではなくて伯の議論はロレーヌ⁽³⁴⁾公によって要約されたし、司教のそれはトリア大司教によって代行された。しかし帝国の諸侯集会は、司教に味方する聖職者たちと、伯を後援する世俗諸侯との間で意見が二分してしまった。より重要なのはカンブレイ司教が、もし彼が前もって、自分の管区に帰着するための安全通行権⁽³⁵⁾を伯から受け取っていないければ、自分の主張を押し通す根拠を殆ど持っていないと感ずていることであった。裁判とは公的で協制的なものであったがしかし、皇帝の役目は同意を作り出すことであって、それを自分の臣下に強制することではなかった。もし1152年のときのようにそのような同意が得られなかった場合には、皇帝は策を練る余地は殆どなかった。結局、フレデリック・バルバロッサが為し得たのは、伯に安全通行権を発行するよう強い、紛争についての結論を先延ばしすることだけであった⁽³⁶⁾。

イングランドの史料もまた、国王の裁判権の公的性格を強調している。1157年、バトル修道院⁽³⁷⁾長とチチェスタ⁽³⁸⁾司教は、司教が修道院を巡察するという主張に対して、修道士たちが激しく反対した案件の解決を求めた。巡察とは司教が宗教施設に対して行使する支配権の表明であった。それは不正の有無を調査することをうたってはいたが、修道院の自立性を掘り崩す効果をも持っていた。その修道院が特権を保持していればいるほど、一層、司教がそのような巡察を実施する権限を制限するよう、熱心に求めた。ヘンリ2世がベリ・セント・エドマンズ⁽³⁹⁾修道院で聖霊降臨祭⁽⁴⁰⁾を祝ったとき、その祝祭は国王が王冠をつけて公衆の面前にあらわれる儀式であり、多くの着飾った見物者を集めるものであったのだが、修道院長と司教にとっては、彼らの紛争を決着させるための場として指定されたのであった⁽⁴¹⁾。聴聞は参加者の人選だけを主とするものであったが、そしてそれは聖堂参事会室で行われたのだが、さらに国王は彼が命じるまでは誰も入れるなと命令しておいたのだが、それでも一般の人が参加した証拠がある。そのように問題は、かなりの規模の聴衆を含む祭事の際に処理されたのであった。そしてそれは国王、宮廷人、王の貴族たちとの間の密接な協議の上になされた。実際、この事例についての修道院側の説明を見る限り、王が任命した大法官トマス・ベケット⁽⁴²⁾と、集められた聴衆が主導権を握り、国王も最初は皇帝の場合と変わらぬような立場へと追いやられていた。

我々は、関係した人物の構成に注意すべきである。氏名をあげられている参加者は大法官のトマス・ベケットと、最高司法官のリチャード・ド・ルーシー⁽⁴³⁾だけである。すなわちこの審問の主導権を掌握していたのは国王の役人であり、国王自身や彼の諸侯たちではなかった。このことはドイツの例と比べると重要な違いを示しているだけでなく、（ドイツの場合には既にみたように、主導権は通常は貴族諸侯に握られていた。）同時に、国王役人を監視する必要についてのごく初期の注釈が示された例にもなっている。『宮廷寓話集』の中で、ウォルタ・マップは注

意深く、ヘンリ1世と、ヘンリ2世との比較を行っている。前者が「誰にも正義や平和が欠けていると感じさせないように」し、その結果「休暇時には自分のいるところへ来ることを許し、その際には伯やバロン⁽⁴⁴⁾や家臣たちをもそこに居させた」のに対して、後者は「(本拠地以外の)何処に居るときでも、自分一人に閉じこもり、正直な人間なら自分を見させるであろうように、自身を見させないようにした。その結果、そのように気軽に会えることに値しないと思われる者たちだけが近づき得たのであった。』⁽⁴⁵⁾マップが描いた特徴は、裁判官としての自分の任務を意識的に果たそうとする、特に理想化された支配者と、それを煩わしい重荷と感じていた支配者との間の違いであった。しかし同様に注意しておくべきは、国王が助言を求めた者たちが誰であるかである。ヘンリ1世は彼の貴族諸侯の言うことに耳を傾けたが、ヘンリ2世は彼の役人や宮廷人に依拠した。(したがって)国王役人が誰であるかが重要ある。役人はしばしば国王が彼の義務を果たすのを妨げたのである。この点は、裁判を受けることができるか否かは、国王に会えるか否かにかかっていたので、より一層重要であった⁽⁴⁶⁾。この点は、国王の邪魔をし得るような役人だけが行ったのではない。例えば1150年代には、アビンドン⁽⁴⁷⁾修道院の修道士たちは、彼らの隣人の一人であるサースタンという人物によって、占有侵奪されていた荘園を取り戻す請求を試みていた。問題点を解決しようとする試みが次々失敗したのち、修道士たちは次の手として、ヘンリ2世に近づこうとした。国王は事件を彼の裁判官たちへと回した。裁判官たちはほとんど、修道院側が嵌められたことを認めたが、それ以上の解決に至ろうとはせず、国王が自ら判決を言い渡したと、後になって聞くありさまだった。事実調査は国王役人によって、王に代わってなされたが、最終決定は王自身が行った⁽⁴⁸⁾。フレデリックは裁判官としての権威を、彼が判決する席に同席した、あるいは判決するよう願いを出した人々の同意から引き出していたが、イングランドではその逆が事実であった。

とはいえ、イングランドにおける国王の裁判行政は、ドイツでの皇帝のそれと共通する特徴をいくつも持っていた。イングランドでも、審理がどこで行われるかは、その結果を左右し得た。年代記作者のプレイクロンドのジョスリン⁽⁴⁹⁾は、ベリ・セント・エドマンズ修道院長のサムソンと、カンタベリー大司教のボールドウィンとの紛争について、次のように記述している。1187年にヘンリ2世の出席のもと、国王法廷が、この事例はノーフォークとサフォークの地元の陪審によって決せられるべきであると決定した時、大司教が割って入り、次のように主張した。それら二つの州は「大いなる愛をもって」修道院のために保持されており、またその地の住民の多くは修道院長に依存する者たちなので、ボールドウィンにとって公正な聴聞がなされるとは言えないと⁽⁵⁰⁾。そのような後援は、紛争が地元から国王法廷へと移送されたときには、一層重要な事項になった。1170年代に、セント・オーバンズ⁽⁵¹⁾の修道士たちと、彼らの隣人の一人であるロベール・ド・バローニュ⁽⁵²⁾との間の、ノーソウ近くのある森林をめぐる対立は、国王忠臣の一人レスタ伯⁽⁵³⁾(彼はロベール側についていた)と、修道士側に味方する王妃⁽⁵⁴⁾とを巻き込んでいた⁽⁵⁵⁾。権力を持つ同盟者の支持を確保することは、イングランドにおいては法の日々の実践の一部であり、一体のものであった。

以上のことから我々は考察すべき最後の問題点へと進むことになる。すなわち年代記作者が、

いかなる種類の判決を好ましいとみなしたかである。ある程度は、この問題は簡単に解決され得る。これに対して困難もある。つまり未決定のまま残される事例の場合は、年代記には殆ど記録されないのに対して、決して決定的とは言えない勝訴でしかないのに、あたかも修道士の共同体の利益として、誇らかに主張することへと（年代記作者によって）変更される傾向もみられるからである。1157年にバトル修道院の年代記作者が、チチェスタ司教が、（法廷での）対立は、それが強さのしるしというよりも、弱さのしるしであると示唆する条件で、妥協によって解決されとの提案を記述した時の例は、（司教が）強力な支持者を見つけることができず、またベケットにも国王にも軽蔑されていたために、司教が法廷での権利主張によって救済を求めようとした例と言える⁽⁵⁶⁾。証拠は少ないが、しかしその少ない証拠は、司法の決定が、ふつうはその史料が示唆しているほどには単純素直ではないと言える世界を、焦らしながら垣間見させてくれるのである。

ドイツの事例も同様に複雑である。一見すると、妥協が紛争解決の普通の方法であるかのように見えるかもしれない。また、相手方に譲歩する人々は、相手方も、自分に有利な点を徹底的に主張し尽くすことを避けるのではないかと期待しているように見える。この種の事例は、たとえば、テュービンゲン伯フーゴが、なぜ公ヴェルフに譲歩するつもりであったのかという理由を説明するかもしれない。それはまた、カンブレール司教とフランドル伯の対立に直面し、相互に受け入れ可能な解決に至ることがもはや不可能であると分かったとき、皇帝が立たされていた苦境をも説明するであろう。と同時にこれらの例は、妥協というものが不可欠である、とみなすのは危険であることを我々に教えてもいる。ほかの要因も作用していたのだ。例えば、どちらかの訴訟当事者に味方した人々の影響力とか、判決を強制しうる力を持つ団体の存在とか、皇帝フレデリックが、自分なら友好的な決着の期待を差し止めることができると考えたとか、あるいは差し止めによってより良い収穫があると見込めるには限度があるとか、などの例である。結局、伯フーゴは、彼を捕えた相手方が生きている間中、囚われの身のままだったのである。

だからと言って、（裁判の）基準や手続きが全く力を発揮しないといっている訳ではない。年代記作者モンスのジルベールは、エノー伯ボードアン⁽⁵⁷⁾がナミュールの相続を求めて起こした訴訟を描く際に、彼の主人公が、確立されている法手続きをいかに遵守したかを細かく記述することに、大いに配慮した。そして、このことを、相手方が法基準をいかに無法にも無視したかということと、好意的に対比して描いている⁽⁵⁸⁾。しかし、基準というものは慣習、理想そして期待の、複雑な網の目と関連しながら存在していたのである。司法の決定は、どこでそれがなされたか、あるいは誰がそれを支持したか、あるいは確立されている判例はいかなるものかなどに依拠していただけでなく、国王をも含めてそれに関係した人々の地位や名誉にも、関係していたのである。

III

イングランドの年代記作者もドイツのそれも、紛争解決のための法定外メカニズムの重要性を

強調している。すなわち、強力な仲介者を見つけたり、不平等な結果を招かないであろうような場所で、審理が行われるように配慮すること、などである。どちらの地域の年代記作者も、裁判が公的で協議重視的であることを共に強調する。そして良き殿ぶりを示すことの重要性を力説する。しかし両者は、このメカニズムを全く異なった枠組みの中に置いているのである。例えばイングランドでは、年代記作者は世俗裁判権に関しては、国王裁判権に匹敵するものがないことを主張している。同様に、イングランド国王の義務は、ドイツであれば何よりも諸侯の責任であるような領域－特に犯人や軽犯罪人の追跡－あるいはその犯罪に対処する何らかの審理機関が存在しないような領域－例えば国王役人の監視－にまで、及んでいるといわれた。一方ドイツではフレデリック・バルバロッサは、イングランドの叙述史料ではめったに論じられることの無いような種類の紛争、例えば貴族間の不和の解決に、主として関わるように期待されていた。最後に、フレデリックは彼の臣下の貴族たちの信頼に基づいて、あるいは相談を受けて行動した。そして皇帝の判決は助言を求められた人々の同意を法制化し、公表したのに対して、イングランドの年代記作者ははるかに積極的な役割をヘンリ 2 世に割り当てていた。

同時にこのイメージは、これら二つの王国の年代記作者たちによって、かくも共通するものとして描かれてきたが、我々が知っているような、国王の或いは皇帝の裁判についての事実と、明らかに対立する。フレデリック・バルバロッサは独自に法手続きを開始すること、彼の諸侯の助言や勧告をそっちのけにすることが十分に可能であったが、訓練を受けた専門職の裁判官団を手元に置くことはできなかったかもしれない。しかしその代りに、彼は、イングランドの国王役人の裁判官団とあまり変わらぬ機能を果たす、騎士層の家系の奉仕を利用し得たであろう。すなわち、フレデリックの権力、そして彼が利用し得た手段は、同時代の年代記作者たちが我々に期待させるようなものよりは、より幅広く、より多様なものであった。同様に、イングランドの国王裁判官は、高度に専門化されていた。現代の歴史家たちの多くが同意するであろうことは、たとえば、国王法廷が支配的な司法機能を発展させ得たのはヘンリの治世後半になってからに過ぎない。さらには、13 世紀になって暫くしてからも、刑事事件が国王以外の領主によって取り扱われていたという、はっきりした証拠がある⁽⁵⁹⁾。同様に国王の権威は全土に行き渡っていたわけではない。ウェールズやスコットランドとの国境地域では、それははるかに限定的であった。その地では蛮族の侵入や、スコットランド人の侵入は、現地領主たちに大きな独立性を与えることを必要とした。最後に、イングランドにも貴族の不和があり、ドイツの皇帝と同様に、ヘンリ 2 世は貴族の不和にかかわらざるを得なかった。要約すれば、年代記史料から浮かび上がるような、中央集権化された王権支配というイメージは、イングランドの国王裁判権の現実を反映したものではなかった。

結論として、これらの国王裁判権についての、史料の記述と現実との間の不一致について焦点を当てよう。結局、今回の講演において掲げた課題には、深長な潜在的意味があることが分かる。すなわち中世ヨーロッパにおける国王の裁判権についての役割、理念と実際である。イングランドの場合には、ヘンリ 2 世治世における行政上の刷新についての年代記作者たちの反応は、国王裁判権の現実を、裁判を行うという支配者個人の役割や責任を強調した理念と、並べて置い

たのだった。同じように、フレデリック・バルバロッサが、ほぼ1世代間支配することのできた中では、もっとも干渉力のある皇帝であったことは、殆どどのドイツの史料にも記録されていない。それとは違って、同時代人は、国王裁判権についての理念を定式化し、それが少なくともドイツの状況に関する限り、それ以前の治世の政治的現実にくっ根差したものとみなしており、年代記者たちは同時代の現実を単に無視するか、退け（て記述し）た。ドイツの年代記もイングランドのそれも、国王の裁判権の理念を構築したが、それはそれぞれの地特有の、文化的・政治的な伝統に深く根ざしたものであった。

イングランドの年代記者たちが、同時代のドイツの支配者よりも、彼ら自身の国王がより大きな権力を持つものとして描いたことは、ヘンリ2世が彼の臣下たちの事柄に、直接また強制的に介入する、より多くの手段を持っていた、という事実を反映しているのは確かである。と同時に彼らのスタンスは、歴史叙述の異なる伝統をも反映している。12世紀のイングランドの年代記者が、どの程度国王や国王法廷の活動に焦点を当てたかを、指摘しておくことは価値がある。彼らはイングランド史を、国王の活動や行為のプリズムを通して見る傾向があった。このことは決して、彼らが国王法廷によって買収されていたとか、国王寄りの立場を取ったことを意味しているのではないが、しかし歴史が国王の活動に触れるにつれ、あるいはその度に、高度に政治的・軍事的な歴史を書いたのである。これに対してドイツでは、支配者の行動に主たる関心をもって記述した叙述史料は殆どない。その記述をしたものはそれを、現地側の、或いは地域側の関心のレンズを通して見たものとして描いた。皇帝の行動は、それが、記述者の地域や機関に影響を与えるものになったときに、例えば、皇帝がその地の領主を軍事援助するために訪れたり、回答を要求したりした時に、記録された。さらにドイツでは、我々は、12世紀後半のイングランドでは、殆ど残っていない種類の歴史記述である家族史にアクセスできる。イングランドには例えば『ヴェルフェン家史』のような著作は無く、或いはエノー伯のことを書いたモンスのジルベールのような年代記さえない。例えばデヴォン伯家やヘリフォード伯家の歴史⁽⁶⁰⁾というものは無い。ドイツでは、同時代あるいはほぼ同時代の観察者によって描かれた皇帝の裁判のイメージが、地方分散的であるように、同時代の出来事も同様に分散的なものであった。

イングランドとドイツの年代記者たちは国王の裁判について記述する際に、歴史記述のそれぞれ異なる伝統に順応することを志向していたのかもしれない。そしてまた、何を記録すべきか、あるいはいかにそれを伝えるべきかについては、彼らの守護者や読者の異なる期待に合わせたのかもしれない。ドイツの観察者たちにとってとても主要であると思われた事項の多くは、同時代のイングランドの年代記者によっては、通常は記録されなかった可能性がある。その逆についてもいえる。その結果、歴史記述の慣例やパトロネジの形式が、この講演で概観しようとした両地域の違いを拡大させたのかもしれない。強調しておくが重要なことは、だからと言ってこれらの違いが羊皮紙の中だけに存在しているとか、テキスト以外には事実はなかったとか、ということの意味しているのではないということである。我々が持つ証拠は、単純な読みを排除するほどに実に多様なものだからである。それにも拘らず、同じ証拠は、我々が概観を得ようとする

る様々な特徴が、我々が期待したかもしれない程度以上に、それらの記録の、資材的、文化的な文脈に依拠していることを、示唆している。

ではこのことは、12世紀の政治や政治文化についての我々の理解を、どこに置くことになるのか。これまでに、統治や司法の現実の高度に多様な枠組みの範囲内にのみ、分析対象を限定したとはいえ、二人の同時代人が、如何に共通する構造やメカニズムを維持していたか、を見てきた。カロリング時代以後のヨーロッパのより広い文脈において、この研究から引き出され得る一つの教訓は、我々は中世ヨーロッパの豊かで多様な複雑さ、そして中世ヨーロッパに生きていた人々が我々に残してくれた遺産、理念そして原理についての解釈の多様性を、探索すべきであるということであるだろう。多様性を持つ一体性があったのだ。

注

- (1) Isidore of Seville. C.560–636. セヴィーリャ司教。西ゴート王国時代のイベリアで、カトリック信仰を守るために百科事典的知識をもって著作した。
- (2) Puseud-Cyprian, *De xii abusivis saeculi*, 7世紀の写本。
- (3) ブランタジネット家のイングランド国王。同時にアンジュー伯、ノルマンディ公、アキテーヌ公でもあった。12世紀後半イングランドの統治で業績を上げたといわれている。
- (4) フリードリヒと表記することがわが国では一般的であるが、著者がフレデリックを用いているので、本稿ではこの表記に従う。以下同様。バルバロッサ（赤ひげ）は通称。シュタウフェン家の神聖ローマ皇帝。
- (5) William of Newburgh, *Historia rerum Anglicarum*, in *Chronicles of the Reigns of Stephen, Henry II and Richard I*, ed. by Richard Howlett, 2. Vols, *Rolls Series*, 1884–85, Bk. II, ch.1, 1, 101.
- (6) *Ibid.*, 1, 102.
- (7) Henry of Huntingdon, *Historia Anglorum: History of the English*, ed. by Diana Greenway, Oxford, 1996, Bk.X, ch.40, pp.776–77. アンジュー伯であったアンリは、1153年のウィンチェスタ協定に基づき、1154年にステヴン王の死後、イングランド王位を相続しヘンリ2世となった。彼の最初の課題は、内乱中の諸侯間の対立状態を解消してイングランドに平和を回復することであった。
- (8) ヘンリ2世は1176年にアサイズ・オヴ・ノーサンプトンを定め、巡回裁判を制度化して現地領主階級を陪審として活用した。1178年には、のちに王座裁判所、民訴裁判所と呼ばれる二つの法廷のものになるクリア・レギスに、民事・刑事の両方の事件を裁く制度を導入したといわれる。
- (9) Ralph of Diss, *Radulfi de Diceto decani Lundoniensis Opera Historica*, ed. by William Stubbs, 2. Vols, *Rolls Series*, 1876, I, pp.434–46.
- (10) Burchard of Ursberg, *Burchardi prepositi Urspergensis Chronicon*, ed. by Oswald Holder-Egger and Bernhard von Simson, *MGH*, Hannover, 1916, p.23.
- (11) Otto of Freising, *Otonis Episcopi Frisiensis et Rahewinis Gest Frederici seu rectius Cronica*, ed. by Franz-Josef Schmale, 2nd. Ed., Darmstadt, 1974, Bk. I, ch.71, pp.278–81.
- (12) Conrad III. (k.1138–52)
- (13) Frederick of Rothenburg. *Cambridge Medieval History*, vol.4, 389; *Gesta Frederici*, I, p.71, ed. by Mierow & Emery, 1953, p.111.
- (14) *Historia Welforum*, ed. and translated by Erich König, *Schwäbische Chroniken der Stauferzeit*, Stuttgart, 1938: rep. Sigmaringen, 1978, c.29, pp.58–59. ヴェルフェン家一族のシュワーベン公家の歴史。
- (15) *Gesta Treverorum archiepiscoporum*, ed. by Waitz, *MGH*, 24, Hannover, 1879, Continuatio III, p.381. ドイツ

南西部トリア市の歴史の写本。

- (16) Albero of Trier, トリア大司教。
- (17) *Historia rerum Anglicarum*, Bk.II, ch.1 pp.104–02 ; *English Historical Documents*, vol.2, pp.348–9.
- (18) *Gesta regis Henrici secundi Benedicti abbatis*, ed. by William Stubbs, 2.vols, *Rolls Series*, 1867–68, I, pp.207–08, 238–39 ; Radolfi, *Opera Historica*, I, pp.434–36.
- (19) Walter Map, *De nugis curialium : Coutiers' Trifles*, ed., by M. R. James, revised by C. N. L. Brook & R. A. B. Mynors, Oxford, 1983, I, c.9, pp.10–11. ウォルタ・マップはヘンリ 2 世宮廷の廷臣の一人で、『宮廷寓話集』は宮廷生活の風刺と批評からなる。
- (20) Theobald, Archbishop of Canterbury, con.1139, d.1161.
- (21) Gervase of Canterbury, *The Historical Works of Gervase of Canterbury*, ed. by Willam Stubbs, 2 vols, *Rolls Series*, 1879–80, I : *Chronica*, I, p.160.
- (22) Otto von Freising, *Gesta Frederici*, Bk.II, ch.3, pp.286–87, 288–89.
- (23) Otto, Bk.II, chs.48, 57, pp.378–79, 388–91.
- (24) Henry the Lion, バイエルン公でありザクセン公。バルバロッサのいとこ。
- (25) Otto, Bk.II, ch.48, pp.376–79 ; Henry Jasomirgott, オーストリア公。
- (26) Hugo of Tübingen, 宮中伯。
- (27) Otto, Bk.II, ch.58, pp.390–91.
- (28) *Historia Welforum*, ch.30, pp.60–61 ; バイエルンのヴェルフ家シュワーベン公。
- (29) *Historia Welforum*, ch.31, pp.66–67. ウルム Ulm はシュワーベンの都市。
- (30) *Ibid.*, ch.31, pp.66–67.
- (31) ハインリヒ獅子公はバルバロッサのイタリア遠征のための動員に参加せず、帝国諸侯の会議で所領を没収され、公位を剥奪され、イングランドへ亡命した。
- (32) *Lamberti Waterlos Annales Cameracenses*, ed. by G. H. Pertz, *MGH*, 16, Hannover, 1859, p.524. カンブレールは当時はエノー伯領、現代の北フランスにある都市。
- (33) Otto, *Gesta*, Bk.II, ch.57, pp.388–91. レーゲンスブルクはバイエルンにある都市。シュワーベン公の住居があった。
- (34) ドイツ語読みではロタリングア。独仏国境にある。
- (35) Safe-conduct. 現代では査証。
- (36) *Lamberti Annales*, pp.524–26.
- (37) Battle abbey は、ウィリアム征服王によって 1066 年の征服後イースト・サセックスに建立された修道院。
- (38) ウェスト・サセックスにある司教座都市。
- (39) サフォークにある富裕な修道院のある都市。
- (40) Pentecost. 聖霊が使徒たちの上に降ったことを記念する日。イースター後の第 7 日曜日。
- (41) *The Chronicle of Battle Abbey*, ed. by E. Searle, Oxford, 1980, pp.174–89.
- (42) Thomas Becket. 大法官（尚書部長官）のちカンタベリー大司教、教会裁判権への国王の世俗裁判権の介入をめぐってヘンリ 2 世と対立し、王の騎士によって 1170 年に暗殺され、その後聖人化された。本文の事例の当時は王との仲は良好であった。
- (43) Richard de Lucy. 最高司法官、ヘンリ 2 世の国王代理。
- (44) Baron. 直属封臣のうち大規模土地保有者。
- (45) Map, *De nugis*, Distichon 5, c.6, pp.470–1, 484–85.
- (46) Map, Distichon 5, c.7, pp.510–13.
- (47) Abingdon. パークシアにある富裕な修道院の存在する都市。
- (48) *Historia ecclesie Abendonensis ; The History of the Church of Abingdon*, 2 vols, ed. by John Hudson, Oxford, 2002–07, II, pp.242–43.

- (49) Jocelin de Brakelond. ベリ・セント・エドマンズ修道院の年代記作者。EHD, vol.2, pp.490-1; J. G. Rokewode, Camden Society 1840, p.37.
- (50) *Chronica Jocelini de Brakelonda: The Chronicle of Jocelin de Brakelond*, ed. by H. E. Butler, London, 1949, pp.50-52.
- (51) ハーフォードシアにある富裕な修道院。
- (52) Robert de Valognes. ヴァロワ名誉領 honour の領有者。EHD, vol.2, p.1000.
- (53) Robert es Blanchemains, d.1190.
- (54) ヘンリ 2 世妃はアリエノール・ダキテーヌ。
- (55) *Historia ecclesie Abbendonensis*, pp.314-15.
- (56) *The Chronicle of Battle Abbey*, pp.174-89.
- (57) エノーは現代ではベルギー領。ナミュールもベルギー領。
- (58) Gislebert of Mons, *Chronique de Gislebert*, ed. by L. Vanderkindere, *Receuil de Textes pour servir à l'étude de L'histoire de Belgique*, Brussels, 1904, pp.161-62.
- (59) 例えば, Kevin L. Shirley, *The Secular Jurisdiction of Monasteries in Anglo-Norman and Angevin England*, Woodbridge, 2004 参照。
- (60) デヴォン, ヘリフォードともに西英の州名。

ビヨルン・ヴァイラー (アバリストウイズ大学歴史学部教授)

朝治啓三 (関西大学文学部教授)